

複雑化する日本の安全保障



Vol.12
原則と現実と

用兵の妙

という言葉があります。寡をもつて衆を破る、つまり少ない兵力で大軍を打ち破ることも同じような意味で使われます。部隊運用の上で、指揮官や参謀が懂れる言葉です。三国志に書かれている、諸葛孔明が琴一弦で司馬懿仲達の魏軍を退けた陽平関の光景を思う人もいることでしよう。

ただし、簡単なことではありません。多くの場合は幻想で、無残に夢

るはずがありません。

あの日、我々が目にしたのは、あり得ない光景でした。蚊帳一枚を吊るして濁流を阻んでいるような感じがしたものです。サダム・フセインの戦車部隊は国境線で止まり、サウジアラビアに侵入することはできませんでした。それを可能にしたのは、米軍の圧倒的な攻撃力です。もし目の前の米軍を攻撃したら、一体どのような報復が来るのか、という思いがイラク軍の進撃を阻みました。そして国境を越えることができないまま翌年の開戦を迎えるのです。

しかし、空挺部隊でイラク軍を排除しクウェートを解放することはできません。そのために米軍はヨーロッパに展開していた部隊を大規模にサウジアラビアに移動させます。その中核は、旧西ドイツに展開していた重装備の機甲師団でしたが、ソ連軍の西進に対抗するために配備されていたこうした部隊を移動させるためには1カ月以上の時間がかかったのです。

当時の米軍には、機動的に動くという要素は乏しいものでした。第二次世界大戦が終わってから40年以上にわたって構築されてきた、ソ連邦を包囲するという封じ込め政策とソ

が破れ、勝ちを制したとしても不本意な経過に終わることが多いものです。帝国陸軍の参謀将校が陥った罠、という方もいらっしゃることでしよう。

軍の学校ではオーソドックスな部隊の運用の仕方をまとめたものとして一般に「教範」と呼ばれるものがあります。模範回答集と言って良いかもしれません。しかし、その通りやっつけても上手くいくものではありませんし、教範通りのことを繰り返しては相手に手の内を読まれてしまいます。古来「兵は生きもの」といわれてきました。戦場という現実の中で、用兵は千変万化して止ま

ることを知りません。

日露戦争の時に梅沢道治という仙台北出身の将軍がいました。薩長が幅を利かして旧幕府側の藩から任官した軍人が出世できないことは当時の通弊でしたが、梅沢は日清戦争の時にも目立った勲功がありません。大佐で予備役編入かといわれている時に日露戦争が起り、少将として出征します。しかし、任されたのは後備部隊でした。

後備とは、兵役を終えた者が再度召集されることです。予備役という連軍の西進を阻止するために旧西ドイツにおける米軍の配備、というシステムでは中東における事態に対処するということとは、当たり前のことではあるのですが、想定されていなかったのです。

米空軍の予備役だった人の思い出を読んだことがあります。米国東部のコンピュータ関連の会社に勤務していた彼の生活は、湾岸戦争勃発で一変します。夕方5時に仕事を終えると車で2時間の空軍基地に出頭し、空中給油の任務に就きます。大西洋の上空に進出して、米国からヨーロッパに向かう空軍の戦闘機に給油を繰り返すのです。帰投して家に帰りシャワーを浴び、仮眠。そして朝7時には再び会社に向かうという忙しい生活を1カ月続けた挙句、彼に言わせればクジ運悪く、所属する部隊は中東へ派遣されることになったそうです。

こうした米軍の動きから見えてくるものは、全く準備をしていなかった事態に対処するための柔軟な対応ぶりです。W・G・パゴニスが書いた『山、動く』は、中東に派遣された米軍の兵站参謀が悪戦苦闘しながら工夫の限りを尽くして準備を進め

呼び方の方が普通でしょう。現役兵に比べて体力は劣り、加えて家族を持つものが多いために士気が上がらないということもあります。普通ならば第一線に出すことはないのですが、兵力が払底していた当時の日本にはもはやそのような兵士しか残っていないのが実態でした。梅沢は、この部隊を率いて緩急自在な抜群の働きをし「花の梅沢旅団」と呼ばれるまでの榮譽を獲得します。

湾岸戦争は、こうした事例とは異なる形で「用兵の妙」を見せてくれるものでした。

イラク軍がクウェートに侵攻しサウジアラビアとの国境に迫った時に、その進撃を止めたのは米軍の空挺部隊でした。教範に示されている空挺部隊の運用は、敵の背後に降下する奇襲作戦です。落下傘で飛行機から降下するのですから重装備は携行できません。つまり部隊が持つ火力は大したものではないのです。戦車を主体とした機甲師団相手に戦う能力など備えていません。ましてや、最初から地上に配備するような運用は考えられないものです。ですから、世界中どの国の教範にも、空挺部隊を地上に配置して敵の機甲師団を食い止める、などということが書かれ

て、ついに勝利を得るまでの裏方の記録です。対ソ連のための重装備の部隊、それが今後必要になるのか、という問いかけも湾岸戦争の中から生まれました。その移動がどれだけ大変なことだったのかパゴニスも触れていますが、もっと重要なことは、これから先米軍のスタイルを変えなければ冷戦後の時代に対応できなくなるという米軍首脳部の理解の素晴らしさです。

そのことについては、来月お話ししたいと思います。



西 正典

Masanori Nishi

1978年東京大学卒業、防衛庁に入庁。那覇防衛施設局長、内閣官房遺棄化学兵器処理対策室長などを経て2013年防衛事務次官。2015年退官。現在ボストンコンサルティンググループ シニアアドバイザー。